する環境下に生物が適応しながら生きていくことを保証する極めて重要な要素の一つであるが、その生物リズムが可塑的であることもまた、それを有する生物にとって非常に意義のある性質であると私は考え、この可塑性を生じる原因についての研究を続けたかったが、その後その機会には恵まれず現在に至っていた。

受賞が与えてくれた機会をいかに生かすか

5月下旬、学会事務局からOM賞受賞の“第一報”が入った(実はその数日前から、周囲の数人が私に妙なほのめかしをするので、もしや、とは思っていたのであるが)。研究助成金や求人等の公募に縁がなかった私にとって、これは初めてのことであり、今でもその時のことを思うと身が震える思いがする。

9月26日、学会大会中の総会での受賞式において(正確にはその前の楽屋から)、日本動物学会の学会賞をはじめとする各賞を受賞される先生方と同席しながら、私はなぜ自分が受賞できたのかをずっと考えていた。受賞の知らせを聞いた時、嬉しい半面で思わず辞退したくなったほど、私は不思議でならなかった。

大学院修了後、非常勤講師として母校に戻るまでの間にあちこちの所属を転々とした。いつまでも身の定まらない中で(それぞれの所属と研究分野で、単に研究テーマに留まることなく非常にいい勉強をさせていただいた。その時々の方でやっていくという選択肢もあったが、結局“可塑性”の低い私は昔のテーマにずっとこだわってきた。けれども、これまでの経歴はすべて今の私の糧になっているはずである)、このままではもう研究で喰っていくのはあきらめた方がいいかも知れない、とくじけ始めていた私を、きっとOM賞は励ましてくれているのだろう、と今は思うようにしている。次は、受賞自体で留まることなく、OM賞が与えてくれた機会(もしくはそのきっかけ)を大切に、いかに生かしていくかにかかっているのだ。

最後に、日本動物学会ならびにOM氏、また私の指導教官であり今回のOM賞への応募を勧めていただいた大石正教授と研究室の皆様へ心より感謝申し上げます。

成瀬 真弓(なるせ まゆみ 1965年生)
奈良女子大学理学部生物科学科非常勤講師
専門：動物生理学、時間生物学

「社団法人日本動物学会女性研究者奨励OM賞とは」

大島 範子

(東邦大学理学部教授、第18期日本学術会議動物研究連絡委員会委員)

社団法人日本動物学会はある篤志家の方からご寄付を頂戴し、その方のご意志を尊重して、2001(平成13)年度総会において「社団法人日本動物学会女性研究者奨励OM賞」(以下OM賞)を設立した。女性研究者による動物学発展への新たな試みを奨励することを目的としており、受賞資格は、本学会の女性会員となっている。受賞件数は毎年若干名である。

OM賞の設立当初は「社団法人日本動物学会OM賞」という名称であり、対象も「若い女性会員」となっていた。しかし、多くの女性研究者が現実にたどるプロセスを考える時、動物学発展への新たな試みを奨励する対象は今はまだ「若い」女性会員に限るべきではないとの考えから、2002年9月に賞選考規程を改定し、募集要項から「若い」

の文字を削除、賞の正確がよくわかる現在の名称に変更された。

第1回(2001年)は定本久世さん(北海道大学大学院生;「軟体動物を用いた学習記憶機構における転写調節因子の機能解析」と松下智子さん(奥羽大学歯学部助手;「魚類味覚MSG、MSAリセプターのクローニング」)が、第2回(2002年)は向後晶子さん(藤田保健衛生大学医学助手;「細胞間接着は遺伝子発現パターンに影響するか?—腎臓の形態形成におけるショウジョウバエ上皮性癌抑制遺伝子哺乳類ホモログの機能解析」)と成瀬真弓さん(奈良女子大学・非常勤講師;「生物時計機構のどの段階が活動リズムの可塑性に関与するか」)が受賞されている。